

今年も茨木市の小学6年生も参加!!



訪問企画 きっかけ
2024年8月6日小豆島の小学6年生の子供たちが茨木市へ訪れた。その際に茨木市にある大学として追手門学院大学へ来るプログラムが含まれており、茨木市と小豆島町の姉妹都市の普及活動を行っている「小豆島プロジェクト」にプログラムのオフアワーがあったことがきっかけである。

小豆島プロジェクト活動報告書 小豆島小学6年生 追大訪問企画 編

文責：
中川知美



当日使用したパズル

姉妹都市交流の機会に！

今年も茨木市の小学6年生も参加。そこで姉妹都市交流の機会になるよう小豆島と茨木市の混合チームにしていた。当日は、ゲームや体験を通して両地域の子供たちがコミュニケーションを取り、楽しみながら回る様子が伺えた。姉妹都市交流を近くで見ることが出来る貴重な機会となった。子供たちにも姉妹都市交流を感じてもらおうことができて嬉しかった。

企画を作る時に

意識したこと！

今回は小豆島と茨木市の混合チームということで、「お互いの地域を知る」という部分を意識し、中身を作っていた。具体的には、小豆島や茨木市に関するクイズや体験を行い、成功するとパズルのピースが獲得でき、集めたピースを組み立てると両地域に関する写真ができていくというものだ。ゲーム性があり、楽しみながら小豆島や茨木市について知ることができるよう意識した。また、大学についても知ってもらおうことができるよう、図書館見学も行った。〇×クイズは、お互いの地域について教え合いながら解いて欲しいという想いを込めて企画した。小豆島の特産品である素麺やレモンを用いた「素麺当てクイズ」や「箱の中身は何だろな?」、茨木の木材を使用した木工体験は両地域の子供たちがコミュニケーションをたくさん取ることができたら良いと思い企画した。木工体験でできあがったコースターは思い出として持ち帰れるようにした。



前回の想いを継承！

前回のガイドブックを今回も使用した。ガイドブックの本身は前回のものからクイズに合わせた追加をする形で作成した。ガイドブックを作成するか悩んだが、前回の作成者の「家族や周りの人にこの日のことをガイドブックを見ながら話して欲しい」という想いを引き継ぎたいと思い、作成した。当日、クイズを解く際のヒントとしてガイドブックを見てくれている小学生を見て、嬉しかった。またコースター作りのデザインとして、表紙のいばらき童子くんやオリブしまちゃんを描いてくれていた子供たちもいて嬉しかった。



茨木×小豆島 コラボプロジェクトについて

基本情報

追手門学院大学の研究機関「成熟社会研究所」で行われているプロジェクト活動の一つです。茨木市と小豆島の姉妹都市交流を深める活動をしています。
メンバーは全員で19人！小豆島出身のメンバーもいます。
今年で8年目になりました！
プロジェクトの目標は、「秋祭りの参加」「小豆島での職業体験の開催」です。
目標を達成するために、4つの企画を行っています。

ビール

今年で5年目のビール企画は、2つの目標を達成するために小豆島の住民の方との仲を深めるための手段としてビールを作りました。茨木市の特産品である「見山の醸造 赤しそ」を使い、小豆島にあるビールのお店の「まめめびーる」で作っています。
今年32kgの赤しそを使っています。実際に小豆島に訪れてビールを仕こんだりしています。去年のビールは「しそとこHAZY」です。特ちょうは赤しそを使っているため、オレンジ色をしていて、優しい味になっています！
「しそとこHAZY」は茨木、小豆島、大学をつなぐ手段でもあります。



当日の様子

当日は、両地域の子どもたちが交流をしながら楽しんでくれている様子が伺えた。クイズの場面では、お互いの地域のことを教え合い、協力しながら解く様子を見る事ができた。また、木工作業やパズルの組み立てでは、自然と両地域の子どもたちが会話をしながら行う様子を見ることができた。



開催までの道のり

【編集後記】
小豆島プロジェクトに加入し、初めて企画を担当するという事で不安が大きかった。一緒に企画を作ってくれた2人も不安が大きかったと思う。私はアイデアを出すことが苦手なため、2人がいてくれて心強かった。当日まであったという間であったが、3人で協力し合いながら企画を作ることができた。この企画は多くの方の支えがあった。この企画は多くの方の支えがあった。今回こそ無事終えることができた。今回の企画で得ることができた「協力する」、「企画には多くの方が協力してくださっている」という部分は忘れずに今後も活動に取り組んでいきたい。
この企画を通して、姉妹都市交流を身近で見ることができ、プロジェクトの存在意義を改めて感じることができ、貴重な機会となった。
「楽しかった」と子供たちが言ってくれてとても嬉しく、やりがいを感じる事ができた。また、企画が成功したことにより達成感を味わうことができ、自信にもつながった。この気持ちは忘れずに今後も活動に取り組んでいきたい。来年度もお声がけ頂けるよう、日々の活動に一生懸命取り組んでいきたい。

昨年の企画を引き継ぐという点で当日まで不安だった。しかし、中川さんの手助けや一緒に企画を作っていたメンバー同士の助け合いで、無事当日を迎えることができた。当日も不安の中での開催であったが、プロジェクトメンバーや職員さんなどのおかげで無事終えることができた。今回のイベントは、多くの方の手助けがあつてこそ成功したものである。